

【研究論文】

生活や遊びの中での音や音楽に着目した 子どもの表現活動における支援のあり方についての検討② ー平成 29 年度「岡崎市定期講座講習あそび講座（音楽表現）」を通してー

滝沢ほだか* 平尾憲嗣* 北浦恒人** 西川由美子*

要 旨

本研究は、前年度の研究に引き続き、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援するあり方について検討することを目的としている。平成 29 年度は「岡崎市定期講座講習あそび講座」において、3 年目の保育士が音や音楽に関連する子どもの表現活動を支援することができるよう、講座の再設計を行った。その上で、音楽あそび講座が受講者の保育における音楽に関わる活動に対する意識にどのような変化を与えたのかについて、講座設計の効果検証を行った。質問紙による意識調査の結果、講座を受講することで「日常の保育に音楽に関わる活動を取り入れること」「音楽に関わる活動の指導計画の立案」「子どもと音楽あそびを通して遊ぶこと」に対する自信は、統計的に有意に高まることは認められなかった。その一方で、個別の変容と自由記述から、本講座を通して、指導計画を作成することの自信が高まる可能性があることが示唆された。

キーワード：あそび、表現活動、音や音楽、保育者研修

I. はじめに

おおよそ 10 年に 1 回、改訂される「学習指導要領」の改定に伴い、『幼稚園指導要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が改訂され、平成 30 年 4 月から各園で実施されることとなった。現場では各教育要領・指針を念頭に置いての保育の構築が望まれ、時代の急速な変化に対応できる保育者の育成及び保育内容の充実を目指している。

3、4、5 歳児いわゆる幼児は各施設において、すべて「幼児教育」という概念で捉え、教育要領のねらい・内容に準じている。更に前文に「自分のよさや可能性を認識する」「あらゆる他者を価値のある存在として尊重する」という文言が示されたことを受けて、幼児教育において育みたい資質・能力、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という 5 領域とは別の捉え方が示され、どの内容にもこの 3 つの側面で捉えてみるが必要となってきた。そしてその資質・能力の基礎が育まれた具体的な姿として図 1 に示す「幼児期の

終わりまでに育ってほしい 10 の姿」が示された（文部科学省 2017）。幼児期の教育は遊びを通しての総合的な指導の取り組みから、「10 の姿」が 5 歳の終わりまでに培われるようにと願い、意図して行っていくことが望まれる。そして 5 領域のねらい・内容について日々の保育のなかで、見通しをもって繰り返し積み重ねていき、その結果として「10 の姿」が現れるようになることが大切であるといえる。



図1 幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿

*岡崎女子短期大学

**岡崎女子大学

これらを踏まえて、本研究では、昨年度に引き続き、生活や遊びの中での音や音楽に着目し、子どもの表現活動を支援するあり方について検討することを目的とする。具体的には、3年目の保育士を対象とした研修「岡崎市定期講座講習あそび講座」について、生活や遊びの中での音や音楽に着目して講座設計を行い、音楽あそび講座が、受講者の保育における音楽活動に対する意識にどのような変化を与えたのかについて、効果検証を行う。また、今後の保育者養成へ結びつく視点についても、同時に検討を行う。

Ⅱ. 「岡崎市定期講座講習」の概要

本講習は、岡崎市と岡崎女子大学・岡崎女子短期大学連携協議会から、保育者定期講座講習の実施協力依頼がなされ、平成28年度より本学の委託事業として実施しているものである。岡崎市と本学との話し合いにより、本講習の目的は、①保育現場に勤務する保育者も養成校の教員も共に「あそび」について深く考え、理論と実践が結びつく工夫をすること、②保育者と教員が交流することによって、相互に保育現場に現状を理解し、よりよい保育実践をめざしていくこと、③何より子どもがもっと遊びたくなる、保育者にとっては組立て甲斐のある保育内容を構築すること、の3点が定められた。

2年目となる平成29年度も昨年度同様「あそび講座」という名称で定期講座講習を開催することとなった。昨年度は、全4回の講座のうち、1回目に旅芸人の福尾野歩氏によるワークショップを行い、2回目から4回目は受講者を3グループに分け、運動・音楽・造形の各講座を毎回ローテーションしながら各分野を満遍なく学べるよう設計がなされた。

今年度は、昨年度の振り返りと岡崎市からの要望を受け、保育の5領域を踏まえ「からだ（健康・身体表現）」「音楽表現」「造形表現」「人間関係と言葉」「環境」の5分野を設定した。また講座を設計するにあたり、下記の点について留意するよう全体で確認がなされた。

- ・ 新しい「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を踏まえた内容にする。
- ・ 育成を目指す資質・能力の三つの柱と、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)を踏まえる。

- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の充実のため、アクティブ・ラーニングの視点から絶えず指導の改善を図っていくことにつなげる。
- ・ 対象の子どもの姿を十分に踏まえて、どのような保育の計画を立案し、実施・省察し改善していくのかというカリキュラム・マネジメントの観点も踏まえたプログラムとする。

平成28年度は2～3歳児を対象としたあそびを講座の中心としていたが、平成29年度は分野毎に対象年齢を表1の通りに設定した。

表1 平成29年度「あそび講座」分野別対象年齢

分野	対象年齢
からだ（健康・身体表現）	3～5歳児
音楽表現	3～5歳児
造形表現	3～5歳児
人間関係と言葉	0～5歳児
環境	0～5歳児

講座を担当する教員は、各分野を専門とする担当教員1～3名と、保育現場経験を有する人を中心とした実習担当教員1名をチームとし、理論と実践が結びついた講座となるよう構成された。

平成29年度の受講対象者は正規または嘱託経験3年目の岡崎市立保育園勤務者と岡崎市にある私立保育園勤務者合計61名で、表2に示す日時に講座が実施された。

表2 平成29年度「あそび講座」実施日時

回数	日付	時間
第1回	平成29年 6月23日(金)	17:00～19:00
第2回	平成29年 8月25日(金)	17:00～19:00
第3回	平成29年 10月20日(金)	17:00～19:00
第4回	平成29年 12月15日(金)	17:00～19:00

Ⅲ. 音楽講座の概要

1. 音楽講座の目的

研究の背景と、Ⅱで示した「岡崎市定期講習」の目的を踏まえ、あそび講座（音楽表現）の目標を、昨年度に引き続き、①保育現場における音楽活動を

ふまえて、保育者が創造性をもって子どもの音楽表現を引き出す活動について、理論と実践を結びつけること、②子どもの発達に応じ段階的に積み上げる音楽活動を取り入れることで、子どもの心情、意欲、態度を養い、発達段階に即した音楽あそびを体得すること、として設定した。

また、期待される成果として①豊かな感性と表現する力を育むため、あそびの中での音や音楽に関わる活動に気づき、受け止め、一緒に楽しむことができる。②なにげなく見過ごしてしまう子どもの素朴な表現や、日常にある音や音楽に気づくことができる。③子どもたちの音楽表現がより豊かなものとなるように、さまざまな音楽表現技術を習得する、の3点を設定し、講座設計を行うこととした。

2. 講座設計

講座を実施するにあたり、受講者のニーズや活動内容を把握するため、岡崎市の保育職で活躍する保育者が、音楽を用いた保育活動において、様々な活動における現場での問題を具体的に振り返る事前質問紙(図2)をつくり、回答を求めた。また、各回終了後にその回の講座の学びを活かした実践記録を課題として課し、日常の音楽あそびの実践を各自が振り返りながら記入できるように設計した。

①知っている(聞いたことがある)わらべうた全てに丸を付けてください かごめかごめ おべんとうぼこ ちゃつぽ なべなべそこぬけ はいちもんめ
②あそび講座(音楽)に期待することはなんですか。期待する順に【 】に1～7 (その他がある場合は1～8)まで番号をつけてください 【 】たくさん音楽あそびについて学びたい 【 】1つの音楽あそびについてじっくりと学びたい 【 】楽器あそびについて学びたい 【 】リズムあそびについて学びたい 【 】幼児曲について学びたい 【 】わらべうたについて学びたい 【 】音楽づくりについて学びたい 【 】その他
③音楽に関わる活動で、困った経験があれば教えてください。
④次の質問について、あてはまる番号に丸を付けてください * 日常の保育のなかで、音楽に関わる活動を取り入れることは？ 1 全くできない 2 ややできない 3 どちらでもない 4 ややできる 5 とてもできる * 音楽に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？ 1 全くできない 2 ややできない 3 どちらでもない 4 ややできる 5 とてもできる * 子どもと音や音楽を通して遊ぶことは？ 1 全くできない 2 ややできない 3 どちらでもない 4 ややできる 5 とてもできる

図2 事前質問紙調査の項目

IV. 各回の概要

1. グランドデザイン

今年度4回あるあそび講座の1回ごとに、『幼稚園教育要領』(以下教育要領)『保育所保育指針』(以下保育指針)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の特に、領域「表現」にかかわる新しく追加された項目を中心に改定のポイントを紹介することとした。

○幼稚園教育要領の改訂のポイント

「第2章 ねらい及び内容」において

- ・「ねらい」…育みたい資質・能力を、幼児の生活する姿から捉えたもの
- ・「内容の取扱い」…幼児の発達を踏まえた指導を行うに当たって留意すべき事項として新たに示した。

【⑤ 領域「表現」】

豊かな感性を養う際に、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすることが「内容の取扱い」に新たに示された。

幼児期の終わりまでに育ってほしい(1)～(10)までの姿のなかで関連する項目は、「(10) 豊かな感性と表現：心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」という部分である。

幼児期において、音素材の特徴を理解したり、音楽表現の技能を身に付けたりすることが求められているわけではない。多様な表現の仕方に触れる経験が自分の表したい表現にふさわしい方法を選択する時に役立ち、如いては、育みたい資質・能力の「学びに向かう力」へとつながっていくと考える。

○保育指針の改定のポイント

今回の改定では、保育指針が大幅に改定されたことを踏まえ、改めてPDCAサイクルの重要性を伝えることとした。乳児・満1歳以上満3歳未満・3歳以上の3つに分けて、ねらい・内容が示され、保育内容の充実が求められている。講座で学んだことを実践し記録して、次の講座で発表したり情報交換したりして、共有し、現場の保育に役立てることを心掛けた。

○幼保連携型こども園教育・保育要領の改訂のポイント

平成26年度にスタートした教育・保育要領では、大筋の改定は満3歳未満児と3歳以上児に分けて、3歳未満児では「保育指針」に準じ、3歳以上の幼児では「教育要領」に準じて行われることが明らかとなった。また、学習指導要領とのつながりとして今までの「連携」から一歩進めて、「接続」へとシフトを移行させるように、学習指導要領との整合性も図っていくことが求められていることを伝えた。

2. 1 回目概要

1回目の講座では、テーマを「ふしづくり」に設定した。保育園や幼稚園での日常生活において、子どもたちや保育士または幼稚園教諭が良く使う言葉や何気なく呟く言葉に旋律（メロディ）を付け、また、その発展したものとして、遊び歌の創作を実践した。幼稚園教育要領に示されている幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として「(10) 豊かな感性と表現」では、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」（幼稚園教育要領 2017）とある。また、第2章 ねらい及び内容での「表現」2 内容の取扱い（2）では、「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。」（幼稚園教育要領 2017）とある。これらを踏まえ、本講座では、ふしづくりを実践し、子どもや保育士または幼稚園教諭が何気なく呟いた言葉や感動した言葉、また普段の生活でよく使うことばに着目し、旋律（メロディ）を付け、表現することにより、身近で素朴なものから自ら自由に表現する喜びを得、豊かな感性を育み、表現する意欲を持つこと。また、保育士または幼稚園教諭の視点として、幼児の素朴な自己表現に気付き受容し、日々の生活の中で幼児らしい様々な表現を引き出し、援助することができるようになることを目的としている。

1回目の講座では、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の内容の取扱いを基にイメージした研究構想図（グランドデザイン）に沿って、本講座の意義や目的を周知し、講座の流れや課題の説明（40 分間）を行い、ふ

しづくりと遊び歌の創作方法についての解説（20 分間）を行った。次にグループ（3 名 1 組グループ）にてふしづくり、または遊び歌の創作と発表練習のグループワーク（30 分間）を行い、その後、グループで創作したふし、または遊び歌の発表（15 分間）を行った。そして、最後に発表の振り返りと次回講座までの宿題として、本講座で学んだ内容を受講者が各自の教育または保育現場に持ち帰り実践し、実践例と記録シート作成の説明（10 分間）を行った。講座内容を図3に示す。

17:00～	講座説明（講座全体と第1回目の内容の説明）
17:05～	グランドデザインの開設
17:45～	ふしづくり、遊び歌の創作方法の解説
18:05～	ふしづくり、遊び歌の創作実践（グループワーク）
18:35～	発表
18:50～	振り返りと次回までの課題について

図3 1回目の講座内容について

ふしづくりと遊び歌の創作方法の解説詳細は以下の通りである。

①子どもたちや保育士または幼稚園教諭が保育園や幼稚園での日常生活において、良く使う言葉や何気なく呟く言葉を書き出す。

②書き出した言葉のイントネーションを調べ、イントネーション譜を作る。

イントネーション譜は音高を高、中、低と3段階に分け、符尾は使用しないで、符頭のみで記す。（図4）



図4 イントネーション譜

③イントネーション譜におおよそのリズムを付ける。

（図5）



図5 イントネーションとおおよそのリズム譜

④正確なリズムを記譜し、拍子を設定する。(図6)



図6 メロディと拍子の設定

ピアノによる和音伴奏を使用するかしないかは自由であるが、使用する場合は長三和音、短三和音、減三和音、増三和音等を推奨した。(図7)



図7 和音の設定

⑥ふしづくりが発展したものとして、遊び歌の曲例を示す。(図8)

遊び歌（双方向性対話型）

「おーちたおちた」

せんせい こどもたち

お ち た お ち た な に が お ち た

せんせい こどもたち

りんご

図8 遊び歌の曲例

グループワークでは、それぞれのグループ内で活発な意見交換が行われ、ふしづくりと遊び歌の創作を行い、グループ発表に向けての練習が行われた。グループ発表では、創作したふしにピアノや打楽器を加えたグループが観られ、また身体表現を付けたグループも観られた。それぞれのグループが独創性豊かな発表を行った。

次回講座までの課題として、本講座で学んだふしづくりや遊び歌を、受講生それぞれが保育または教育現場にて実践し、報告することとし、記録シートを配布して本講座は終了した。

3. 2回目概要

2回目の講座では、テーマを「うた」に設定した。あそびの中での子どもの歌唱に着目し、保育者が日頃子どもと歌う代表的な幼児曲を取り上げ、現場での活動における表現へと繋げる新たな視点への意識付けについて受講者の理解を深めるため、歌唱を通じて実践を行った。具体的には、本講座における概要で示されている、「保育者が創造性を持って子どもの音楽に関わる表現を引き出す活動について、理論と実践を結びつける。」における、創造性について、五領域の表現領域での、身体表現、造形等や、他領域との繋がりを意識することに重きを置き、今まで何気なく歌われている幼児曲の歌詞を深く読み解くことや、音楽における描写を明確に把握することで、その幼児曲の世界観がどのように構築されているかについて受講者が認識し、それを踏まえた表現へと結びつけるためのイメージを持つこと、実際の活動で求められる技術や知識について認識を深めることを目的とし講座を行った。

2回目の講座では、改定された保育所保育指針について、従来の指針からの変更点とその意図や、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領との繋がりについての説明（25分間）と、テーマ「うた」について、ぞうさん、山の音楽家、にじ、森のくまさんの4曲を、①登場人物(動物や物等を含む)、②複数の登場人物(動物や物等を含む)、③ナレーション(保育者)、④登場人物(動物や物等を含む)とナレーション(保育者)、⑤ナレーション(保育者)と幼児、の5つに分類し、保育者が音や音楽から具体的な情景やイメージを描くための幼児曲の分類について受講者への説明(40分)の二点に重点を置き講座を行った。特にテーマ「うた」の部分では、上記の5つの分類を基に、ぞうさんを②、山の音楽家を②、にじを①③、森のくまさんを②へと分類し、それぞれの幼児曲における情景や世界観について、幼児曲に書かれている様々な音、音形、リズム、和音が何を模倣しているのかを明らかにし、読み聞かせを基にした歌唱表現への応用へと結びつける実践を行った。具体的には、ぞうさんでは、誰と誰と会話なのか、ぞうさんとの距離感がどれくらいか、象の子どもはお母さん象をどのように思っているのか。山の音楽家では、どのような季節の山なのか、動物達は誰に向かって語っているのか、どのような心境で語っているのか、登場する動物における年齢や性別はどのようなになっているのか等、歌詞や音楽から

情景を創造する視点を持つことについて、受講者への意識付けを、受講者が各自で考え発表することで深めた。また、前回の課題と2回目の講座での学習内容を踏まえた発表では、3人1組の4グループで、表3の発達段階における子どもの活動を基に、現場で想定される環境、状況、子どもの年齢を設定し、各園で実施した課題の題材から簡単な手遊びやゲームをつくり、ロールプレイによる発表を各グループ3分程度で行った（15分間）。最後に3回目に向けた課題として、1回目、2回目の講座での学習を踏まえ、子どもの自由遊びの時間から、子どもの主体的なあそびについて、保育者がリズムあそび（言葉あそび）を有効的に用い、8小節程度の会話風のあそびを考え実践する課題について説明を行った（10分間）。受講者への補足として、その場で即興的に浮かばない場合は、あらかじめ子どもたちの自由遊び時間における姿を想定し考えておいたものを実践しても良いことや、課題での考察の欄については、様々な事柄（改善点や反省点）を記入すること等も併せて伝達を行った。また、課題の意図として、保育所保育指針における5領域の表現における内容の取扱い「豊かな感性は、身近な環境と

表3 発達段階における子どもの活動

		0歳児		1歳児	
時期		生後すぐ	生後2、3か月頃～	生後7か月頃～	生後10か月頃～
音域		A1周辺		1歳0か月頃～	1歳6か月頃～
音声		A～	A～ウ～	パプー ターター	マンマ
音声の種類 (言葉)		・泣き声 ・柔らかい声（授乳時など）	・喃語のような声（授乳のことば）	・喃語 ・様々な母音や子音を発する	・初語
その他		・母親への要求として泣き声を発する ・泣き声は呼吸運動に伴い変化する	・喃語のよい例等 ・月齢が進むにつれ音声の種類が増える	・泣き声に間隔が付き始める ・大人のこぼや音声の抑揚や音の高さを真似し始める ・好きな音を繰り返し発する	・発音もしやすく、喃語に聞いていて好きな言葉を探する
				・行動範囲も徐々に広がり、耳にした言葉と自分の言葉やその抑揚を真似て発する	・様々な二語を発するようになり、大人の歌いかけ等の気に入った部分を口ずさむようになる ・発音や音程等はいまじい音や歌に合わせて手を動かしたり踊るようになる
		2歳児		3歳児	
時期		2歳0か月頃～	2歳6か月頃～	3歳0か月頃～	
音域		B～A1		A～B1	
音声		ママのほんあつた		ぼくおながすいてきたから ごはんたべたい	
音声の種類 (言葉)		・多語分（三語程度）	・更に様々な多語分（三語以上）	・簡単な文章	
その他		・多語分を話すようになり、発音が良くなるにつれて歌のメロディを歌おうとする ・音程はあいまいだが、抑揚がつかはしめる ・一人でうたう	・歌しように入っている歌のフレーズを長く歌おうとする ・伴奏に合わせて歌えるようになってくる	・短文の構成がしっかりしてきて、思っていることを言葉を通して表現できるようになる。 ・曲調に合わせて歌えるようになってくる ・曲調の雰囲気の変化等を感じ取り、その真似をしようとする 一人で歌うことが多い	
		4歳児		5、6歳児	
時期		4歳0か月頃～		5歳0か月頃～	
音域		A～C2		A～D2	
音声		ぼくおながすいてきたから ごはんたべたいだけママがまだだいたいうんだよ		ぼくおながすいてきたからじゅんくんもいっしょにたべにいこう	
音声の種類 (言葉)		・複数の文章をまとめる		・会話	
その他		・複数の文章をまとめるようになり、内容がさらに豊富になっていく ・強調や抑揚などを歌などで表現できるようになっていく ・思った音の音を出せるようになり、リズムや音程が安定してくる ・歌詞の内容を理解し始め、歌の登場人物や情景を想像することが出来る ・体を動かしながらみんなで歌う楽しさを感じ始める		・うたの表現を楽しむ、歌詞の内容に共感したり曲調の変化に応じた表情をみせることができる ・替え歌など歌詞をつかって歌うことができる ・友達や家族と歌を聴いて合いの手をいれたりすることができる ・うたのリズムを手拍子して楽しむことができる ・うたを伴った遊びやゲーム等、体を動かしたり踊ったりしながら楽しむことができる	

十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動をほか

の子どもや保育士等と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」との関連性があることを伝え、子どもの自由あそびにおける主体的な表出や表現を展開することに重きを置くことを伝えた。

講座の内容については図9の通り。テーマ「うた」での資料は図10を参照。

17:00～	講座説明（第2回目の内容の説明）
17:05～	保育所保育指針の改定について
17:30～	テーマ「うた」について
18:10～	第1回目から第2回目までの課題の振り返り
18:20～	課題を各グループで共有し、3人1組の4グループで課題の題材を基に簡単な手遊びやゲームの創作
18:35～	発表
18:50～	振り返りと次回までの課題について

図9 2回目の講座内容について

あそび講座（音楽）うた		H29年 8月25日
先生が普段子どもたちと一緒に歌う活動について、振り返ってみましょう		
★歌は子どもにとってどのような存在でしょうか？		
・		
★子どもにとって歌う楽しさとは？		
・		
★幼児が楽しんで、のびのびとうたう活動をするために保育者に必要な知識とは？		
・		
①こどもが「歌の世界に入り込み、疑似的に歌を通してその世界を体感するためには」、保育者自身が歌の特徴や歌詞の魅力に気づき、共感し、表情豊かに表現できることが重要である。漠然とした雰囲気表現するのではなく、音楽の構成や歌詞の意味を正しく把握し、ふさわしい表現を理解することが必要である。また、曲の世界のイメージを明確にし、造形的な表現、身体的な表現等との横断的な広がりを持たせた表現活動を目指すことにより、子どもより豊かな感性を育てることができる。		
②自由時間（自由遊びの時間）や散歩、遠足など、幼児の生活や遊びの中になげない機会をとらえ、子どもの主体的な遊びを援助する技術や知識を養うことが必要である。		
※（保育者、周りの子ども、自然等[子ども]		
※子どもが保育者の表現をどのように捉えるかは自由		
I、うたの表現について		
・その幼児曲の歌詞を誰が歌っているのか、何の音なのかを意識できていますか？		
ぞうさん（ ）		
山の音楽家（ ）		
もりのくまさん（ ）		
にじ（ ）		
※各自で、「ぞうさん」「もりのくまさん」「山の音楽家」「にじ」について、歌詞の内容から誰が話しているのかを想像し、役を記入してみましょう。		
・どのような気持ちや情景を取っているかをイメージできていますか？		
※グループでそれぞれ曲を1曲ずつ選び、それぞれのフレーズにおける気持ちを探ってみましょう		
・時間経過における物語（音楽）の進行について意識できていますか？		
※にじを見つけたのは果実の中のどの部分か探してみよう		

図10 テーマ「うた」配布資料

4. 3回目概要

3回目はサウンドスケープをテーマに講座を行った。講座の概要を図11に示す。まず、耳を澄まして教室で聞き取れる音を全て書き出し、共有をおこなった。その上で、身の回りのものを使ってクリスマスソングを演奏した動画を音のみで鑑賞し、使っている音を書き出した。動画を見ながら答え合わせをしたところ、予想とは違うものから音が出ていることに、驚いている様子が窺えた。

その後、グループごとに学内に出て、音の採集をおこなった。最後は、白い大きな画用紙に採集してきた音をマッピングし、サウンドマップを完成させた。

17:00～	講座説明（第3回目の内容の説明）
17:05～	幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂について
17:30～	テーマ「サウンドスケープ」について
17:50～	音の採集（学内散策）
18:15～	学内で収集した音をグループごとに1枚の画用紙に絵で表現（サウンドマップの作成）
18:30～	発表と講評
18:45～	前回課題の振り返りと次回までの課題について

図11 第3回目の講座内容について

5. 4回目概要

4回目は、1回目から3回目までのテーマから気になるものを取り上げ、まずは個人で指導計画を作成した。その上で、グループごとに指導計画を共有し、教師役1名、子ども役2名としてロールプレイを行い、最後は模擬保育として発表をおこなった。また、それぞれのグループに対して、音楽の表現における視点、保育の視点からコメントを行い、学びを深めた。講座内容を図12に示す。

17:00～	講座説明（第4回目の内容の説明）
17:05～	模擬保育に向けて指導計画の作成
17:25～	グループ毎に指導計画を共有、模擬保育にむけた準備
17:45～	模擬保育の発表と講評
18:15～	前回の課題の振り返り
18:30～	小学校との接続について
18:50～	講座全体のまとめ

図12 4回目の講座内容について

V. 研究方法

1. 対象者

本講座（音楽表現）の受講者である正規または嘱託経験3年目の岡崎市立保育園勤務者、岡崎市にある私立保育園勤務者12名

2. 質問紙調査

1回目講座の際に事前の質問紙調査を、2回目～4回目のあそび講座（音楽）終了後に事後の質問紙調査を行う。なお、質問項目は行動目標の形式で設定し、質問に対する回答は「とてもできる」「ややできる」「どちらでもない」「ややできない」「全くできない」の5件法で回答を設定した。質問項目を表4に示す。

表4 質問紙調査の質問項目

事前	項目1	日常の保育のなかで、音楽に関わる活動を取り入れることは？
	項目2	音楽に関わる活動を取り入れた指導計画を作成することは？
	項目3	子どもと音や音楽を通して遊ぶことは？
	自由記述	音楽に関わる活動で、困った経験があれば教えてください
事後	項目1	今後の保育において、音楽あそびに関わる活動を取り入れることができそうですか？
	項目2	音楽あそびに関わる活動を取り入れた指導計画を作成することができそうですか？
	項目3	子どもと音楽活動を通して遊ぶことができそうですか？
	自由記述	講習に参加しての気づき、または感想があれば自由に記述してください。

VI. 結果と考察

質問紙調査では、質問項目の有効回答は11名であり、自由記述については、事前5件、事後10件の回答を得た。質問項目における回答人数を表5に示す。また、統計分析として、「とてもできる」「ややできる」と回答した人をポジティブ群（P群）、「ややで

表5 質問紙調査の回答人数

	【事前】			【事後】		
	項目			項目		
	1	2	3	1	2	3
とてもできる	3	0	3	3	0	5
ややできる	7	5	7	8	8	6
どちらでもない	0	6	0	0	1	0
ややできない	1	0	1	0	2	0
全くできない	0	0	0	0	0	0

きない」「全くできない」と回答した人をネガティブ群（N群）として分類し、Fisher's exact test を用いて事前と事後の変容について検討を行った。その結果、3つの項目全てにおいて5%水準での有意差が確認されなかった。また対応のあるt検定においても、3項目全てにおいて有意差は出なかった。

昨年度は1回毎に各分野をローテーションしたため、73名を対象として同様の質問紙で調査を行ったところ、1%水準での有意差が確認された(滝沢ら2017)。しかし、今年度は分野を深めるため、4回連続して同じ人が同じ講座に参加した。そのため、対象者が12名と少数であったことが、統計的な結果が出ないことに繋がったと考えられる。また、表5に示すように、今年度は3年目の保育士と限定したため、事前の結果がポジティブな人が多く、事後との結果と差がでなかったことも原因の1つと推察される。

しかし、個別の変化を丁寧にみていくと、変化のある様子が伺える。項目1については、事前平均4.09、事後平均4.27であり、事前から事後でできるという意識が高まった人が3名、変化の無かった人が6名、意識が下がった人が2名であった。また、項目2については、事前平均3.45、事後平均3.55とほぼ変わらない数値ではあるが、意識が高まった人が5名と約半数弱おり、変わらなかった人が4名、意識が下がった人が2名であった。項目3では、事前平均4.09、事後平均4.45とt検定の結果はでなかったものの、平均値は事後に高い値を示した。意識が上がった人は3名、変わらなかった人が7名、下がった人は1名であった。

これらのことにより、項目1と項目3については、3年目の段階ですでにある程度できるという自信を得たうえで、講座に参加している状態にあることが明らかになった。また、項目2の指導計画については、講座を受けることにより、指導計画の作成に関する自信が高まる可能性があることが示唆された。

VII. まとめ

統計的な結果はでなかったものの、VI章に示したように指導計画についての自信が高まる傾向にあるという講座設計の評価が明らかとなった。また、担当者間の振り返りのなかで、目標として掲げていた内容の中の、特に「気づく」という点に関して、毎回の課題の成果物や、講座内に受講者が作成した指導計画の内容や、発表における模擬保育の内容から、新たな視点を獲得していると感じたとの意見がでた。また、自由記述からは昨年度と比較して、テーマごとに毎回の講座を行ったことに対し、受講者から講座の内容が理解しやすかったとの感想が得られた。課題での実践について記した記録シートを、講座内にて、受講者同士が共有できるよう、冊子としてまとめたものを配布し、また、その内容について各自が報告を行ったことで、保育の仕方を学び共有できたとの感想も寄せられた。

平成30年度から実施される幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領について、理解を深められるよう、毎回の講座において、段階的に説明を行い、特に、新たに改正された部分について、詳しく説明を行った。また、最終回においては、小学校の学習指導要領改訂の方向に合わせ、接続についても併せて、つなげられるよう説明を行ったことが、項目2の指導計画の作成の自信が高まる傾向に繋がった一因と考えられる。

毎回の講座において、決められたグループでの話し合いと発表を実施したため、講座の回数を重ねるごとに、グループ内でのコミュニケーションが活発になり、他の園の状況や、自分の意見を話せるようになったことから、発表に向け、円滑に話し合いが行われるようになっていく様子がみられた。一方で、前回における課題の成果物から、課題実施における留意点や課題の意図等について、充分理解が得られていない状況も見受けられた。

今後の課題としては、受講者に課す課題の説明とその振り返りについて、教員が充分に対応できるよう、各回の担当教員の検討を行う必要があることが挙げられる。次年度の研修実施に向けての参考意見として、「遊びのレパートリーが増えるような研修は有難い。」という意見があった。あそび講座（音楽表現）では、新しい手遊びやリズム遊びを覚えるのではなく、受講者が園に持ち帰り、工夫し応用できよう、既存の音楽あそびに囚われることなく、子どもの主

体的な活動から、子どもの感性を引き出すことができるような、音や音楽あそびについての新たな視点を獲得することを念頭に置いた講座を、今後も実施していきたい。

付記

本論文は、滝沢（Ⅱ章、Ⅲ章、Ⅳ章4と5、Ⅴ章、Ⅵ章、Ⅶ章）、平尾（Ⅳ章3）、北浦（Ⅳ章2）、西川（Ⅰ章、Ⅳ章1）が執筆し、滝沢が全体構成を担当した。

本研究は、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得たものである。

参考文献

- ・滝沢ほだか・平尾憲嗣・北浦恒人・西川由美子『生活や遊びの中での音や音楽に着目した子どもの表現活動における支援のあり方についての検討-初任者を対象とした「岡崎市定期講座講習あそび講座」を通して-』岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究 第3号, 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学, pp29-36.
- ・文部科学省「幼児教育部会における審議のまとめ」
2016年8月26日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/057/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377007_01_4.pdf
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』（2017）
- ・厚生労働省『保育所保育指針解説書』（2017）
- ・内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』（2017）